

祝

2013年9月 群馬大学博士号(保健学)取得

豊島幸子さん(60歳)取得時59歳)

【論文テーマ】高校生における麻疹・風疹抗体保有状況と教育効果

感染症対応の現場経験を体系化し、地域の健康増進と人材育成に活かす

2007年6月、豊島幸子さんが勤務していた高校で、たてつづけに7人の生徒が麻疹に感染した。全校生徒数700名弱でこれだけの規模の集団感染は県内初。養護教諭であった豊島さんは、群馬県感染症研究所のスタッフらとともに、全生徒の母子手帳を回収し罹患歴や予防接種履歴を確認するなど、その中心で拡大防止対策に追われた。

それ以上の拡大はなく、7月24日に終息宣言が出たが、豊島さんはその経験を踏まえ、振り返りとして、感染症発生時の対応マニュアルと啓発ポスターづくりに取り組むことになる。それが博士号挑戦の出発点となった。

■麻疹(はしか)は実は怖い感染症

麻疹ははしかとも呼ばれ、誰もが罹る病気と軽く見られる傾向にあるが、大人が感染すると症状が重く、肺炎や脳炎を併発し死に至ることも少なくない怖い感染症。しかも感染力は非常に強い。昔は症状の軽い幼児のうちに感染し自然に抗体ができていたのが、予防接種の普及にともない大流行が減り、予防接種を受けてない人や1回の接種で抗体が十分でない人が、10代、20代になって感染・発症するケースが増えている。

麻疹はWHOの指導により世界中で根絶を目指している感染症のひとつで、予防接種の徹底により先進国の多くが国内感染ゼロに成功している。日本も2012年までに麻疹ゼロを目指して、5年間予防接種無料化などの対策が行われたが、残念ながら根絶には至っていない。2度の予防接種が十分には行

き渡らないのが原因だが、その理由のひとつが豊島さんの論文テーマにもなった、感染症に関する健康教育の効果にあると考えられた。

■自分が把握・管理する「予防接種手帳」を提言

豊島さんは08年と10年に高校生1155人を対象に「感染と免疫の基礎的知識」という健康教育を行った。麻疹・風疹抗体価測定を希望し測定したA群、測定を希望しなかったB群、対照群として抗体価測定には触れなかったC群で、教育の前後にアンケート調査をし理解度を比較した。教育前の平均点(5点満点)は3・38。教育後に最も理解度が上がったのはA群で4・58、B群は4・10、C群は3・88と顕著な差が現れた。抗体価測定で自分のことと意識づけたことが教育効果を高めたことがわかる。感染症の正しい知識を持つことと同時に、自分の



博士号取得の最初の報告は大学教授だった義父の仏前に

罹患歴や予防接種履歴を把握していることも大事だ。現在は母子手帳くらいしか辿れるものがないが、母子手帳が本人に引継がれることは少ない。本人が把握・管理し、感染症教育に役立つ「予防接種手帳」が必要と提言している。

■学ぶ途中で得るものが大きい

博士号を取得したことで、14年4月から群馬医療福祉大学の准教授として採用され、自らの貴重な体験や研究成果を、養護教員を目指す若者の指導に活かしている。また、博士論文と平行して、群馬大学の「地域・大学循環型保健学リーダーの育成」プロジェクトを修了し、地域保健学リーダーとしても活躍している。地域と連携した出前授業などを通して地域住民全体の健康アップという重要な活動に携わり、充実した日々を送っている。

「研究に取り組んでから6年間は、仕事を終えたあと夕方から大学の授業、夜と週末は論文執筆に費やし、家族には大分負担をかけましたが、義父が大学教授だったこともあり、理解はしてくれていたと思います。研究半ばの3年目に、上毛新聞の小さなカコミ記事でこの支援事業を知り応募しました。費用面はもちろんのこと、とても勇気づけられ感謝しています。群馬大学大学院の指導教官・嶋田淳子教授も事業の意義を評価し応援してくれました」

これからチャレンジする人には「語学が苦手な私、スクールに通いながら英語の論文を書きました。学ぼうとすればなんとかなるし、学ぶ途中で得られるものが大きいですよ」とメッセージ。